



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | モシリ・エル・ウシ : カルチュラル・ランドスケープの力 (※リ・シはアイヌ語表記では小文字)                                   |
| Author(s)        | 井上, 典子                                                                            |
| Citation         | アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 : 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 4-5                                    |
| Issue Date       | 2024-03-29                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/92884">https://hdl.handle.net/2115/92884</a> |
| Type             | other                                                                             |
| File Information | ronshu_biratori (4).pdf                                                           |



## モシリ・エル・ウシ

### カルチュラル・ランドスケープの力

井上典子  
追手門学院大学 教授

文化財保護法の改正において文化的景観という概念の検討に深く関わった金田章裕は、地理学で使われる文化景観を「大地の上における人間の営為のいわは可視的な表現」（金田 2013）であるとしたうえで、そのうち負の遺産ではないものを、世界文化遺産登録基準としての、あるいは文化財保護法に基づく文化的景観であると整理した<sup>1</sup>。これら二つの文化的景観の差異も不明瞭なまま、文化財保護法に基づく文化的景観は現在、その制度運用において生じる様々な検討課題を避けるために、ますます限定的な領域へとその対象を収束しつつあるように見える。こうした日本の動きに対して、世界文化遺産分野に強い発言力を持つイタリア文化省は、カルチュラル・ランドスケープという概念が単なる流行として未整理で広がることに危惧を表明しながらも<sup>2</sup>、人間生活に関連するあらゆる場所に注目が集まる動きを利用し文化遺産の概念拡大を推進した。このイタリアのアプローチは、耕作放棄地、ヴァナキュラな集落、産業衰退地区等を含むすべての景観を対象とした欧州景観条約へと発展した。

筆者の、平取という場所への関わりは 30 年あまりに及ぶ。最初の出会いは北海道大学農学部教授辻井達一先生の導きによるものであり<sup>3</sup>、環境省等の事業を通じて、チャシやコタンだけでなく、変化し続けるシシリムカを深く体感する機会を得た。その後、釧路、厚岸、別海、中標津、網走と東北道を知ることが増え、北の大地が持つ景観の多様性を認識するようになった。これらすべての地域がアイヌ文化に関連しているが、その中で平取が特徴的に示す魅力といえ、やはり「モシリ・エル・ウシ」すなわち川と森の動態に対して継続的に介入しようとするアイヌ文化を軸とした地域の自治であろう<sup>4</sup>。確かにかつてのような大地へのかかわり方ではないが、しかし、変化しながらも、平取では確実に新たなかかわり方が模索されており、その動きは常にカルチュラル・ランドスケープを刷新している。

北海道のカルチュラル・ランドスケープと比較しうる事例として、四万十川の文化的景観がある。シシリムカと同様ここでは、四万十川と、森や人との様々な関係を体感することができる。しかし、四万十川が示す力強さやスケール感とは別に、このカルチュラル・ラ

---

1 金田章裕 (2013) 「人の歴史が刻んだ大地の遺産—文化的景観」公益社団法人日本地理学会『日本地理学会発表要旨集』341。この中でさらに金田は、従来 *Landschaft* の訳語であった景観という日本語について「ドイツ語が本来有していた政治的・社会的結合体の意味を失い、いまや英語がもつより視覚的な意味が強く前面に出る結果となっている」と述べている。イタリア文化省が実施した景観調査報告書においてミラノ工科大学の Lionella Sczzosi は、*Landschaft* に対する *paysage* や *paesaggio* について、「構築された場所」の意味が強いと説明している。

2 Sczzosi (ed.) (2000)

3 元財団法人北海道環境財団理事長 <https://www.heco-spc.or.jp/ramsar-fund/index.html>。2012 年にラムサール湿地保全賞（科学部門）を受賞。北イタリアのフェッラーラ低湿地帯で筆者が湿地再生事業の調査を行っていた際に、辻井先生の指導を受けた。

4 北海道教育委員会は「モシリ エル ウシ」を「大地がたわむ」と訳している。[https://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/5/3/\\_/H19bunkazai-nenpo3.pdf](https://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/5/3/_/H19bunkazai-nenpo3.pdf) (20240220 確認) ただしインタビューによれば、平取町アイヌ施策推進課は、この概念を重視しつつも、アイヌ語表記・訳については引き続き要検討との見解を示している。



写真1 河岸段丘と峡谷のコントラスト  
額平川筋の景観（芽生）© 平取町



写真2 河川合流点と折りの場の立地  
額平川筋の景観（宿種別）© 平取町

ンドスケープをいわゆる「日本的な」枠組において解釈しようとする流れは根強い。

平取のカルチュラル・ランドスケープは、空間的な広がりにおいて、生物多様性や文化的多様性において、暮らしの今日的な変化において、いわゆる「日本的な」という言説に象徴されるある種のイメージを凌駕している。そのまま北極海か、地球のどこか別の場所に立ち現れていても全く不思議ではない。モシリ・エル・ウシというアイヌ語が象徴する生態系と文化のダイナミズムが、多様性と変化に富んだこの地のカルチュラル・ランドスケープの魅力を生み出している。

#### 参考文献

池田忍編（2020）『問いかけるアイヌ・アート』岩波書店

川上勇治（2003）『増補版サルウングル物語』すずさわ書店

金田章裕（2013）「人の歴史が刻んだ大地の遺産－文化的景観」公益社団法人日本地理学会『日本地理学会発表要旨集』341.

北海道教育庁（2008）「平成19年度北海道文化財年報」[https://www.dokyo-i.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/0/5/3/\\_/H19bunkazai-nenpo3.pdf](https://www.dokyo-i.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/5/4/0/0/5/3/_/H19bunkazai-nenpo3.pdf)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（2011）『奈良文化財研究所学報89：四万十川流域文化的景観研究』独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所，<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/16669>

Scazzosi, L.(ed.) (2000). Politiche e culture del paesaggio. Esperienze internazionali a confronto, Gangemi Editore.

10+1website「いまの地域の変化を許容し、価値を認めること－文化的景観の課題と可能性」<https://www.10plus1.jp/monthly/2019/02/issue-02.php>

Yoshihara, H., Inoue, N. (2018). "The Sacred Landscape of Ainu Culture and its Cultural Landscapes: Case Study on the Conservation Strategy in Biratori City, Hokkaido," in Niglio e Dallari (eds.), Almatourism, Sacred Landscapes: An invaluable Resource between Knowledge and Sustainable Local Tourism Development, University of Bologna, Italy. vol.9, N.8, pp.107-128. <https://almatourism.unibo.it/article/view/7725>